

『獄中記』にみるワイルドのイエス

山口哲生

(活水女子大学教授)

ワイルドは、地位、名誉、妻子、財産、自由の一切を剝奪されて囚人となった「悲しみの人」たる自分を、Via Dolorosa のイエスに重ねあわせて、自分の悲劇性を表現してみた。彼は自分のロマンティシズムの美学をイエスの生きざまに託して表現しようとしたのであるから、イエスは手段である。ワイルドは宗教的レベルでイエスと出会ったのではないから、彼のキリスト論は、自分の芸術観を正当化するためにイエスを利用して語った彼の芸術論である——と、かつて私は考えた。

しかし、芸術観を表しているのだから宗教性はない、と一方をとれば他方を切りすてるというのではなく、芸術観の中にも宗教性があるとは言えないか、と今回は考えてみた。

George Woodcock は「ワイルドがキリスト教の神学的な面にきちっとした関心を示さなかったからといって、キリスト教にたいする彼の興味が必然的に〈審美的〉で、深みのないものと決めてかかるのは間違いである」と *The Paradox of Oscar Wilde* の中で述べている。獄中のワイルドは罪というものを抽象的な次元で語っているのではなく、実際に罪を犯し（というのは、当時の法律、宗教にてらして、ワイルドがやったことは crime であり sin であった）、実際に刑に処せられていたという状況であればこそ、何ごともない時よりはるかに切実な思いをもって、イエスに接近していたと考えられる。

「キリストがもっとも現実的という意味でもっともロマンティックなのは、罪人にたいするときである。……彼は、いまだ世の人々に理解されていないやり方で、罪と苦しみをそれ自体で美しい聖なるもの、完璧の様式と見た」とワイルドは言うが、このようなイエス観がもっともよくあらわれているのが、イエスに香油を注いだ女について語っているところであろう。高価な香油をイエスに注いだこの女の行為は、計算に基づいたものではなく、その時、そこで出会ったイエスへの、あらゆる打算を越えた愛の集中であった。そこに魂の本当の美しさを見ているイエスをワイルドは見ている。ワイルドは、いわば、ダグラスへの愛のために人生を御破算にした。愚かなことと世間は嘲弄するし、自分でもそう思ったであろう。しかしイエスが香油の女にたいして「この女は多く愛したから、その多くの罪は許されている」と言うのを聞いて、ワイルドは世間の見方とはまったく違うイエスの見方に感動した。ワイルドは、イエスを頭で理解していたのではなく、体で感じていた。イエスを大いに神格化し、その神聖さを説くことはできても、“the dynamic forces

of life” が血肉化しているイエスを語るができない人々とは違って、ワイルドのイエス観は、そういう人々からは異端として非難されるであろうけれど、不思議に生き生きとしたイエスを、体温をもったイエスを、伝えてくれる。

ワイルドが獄中で愛読したルナンの『イエス伝』は、「イエスは人の心を、それが内包する愛の強さによって評価した。罪を犯したがゆえにへりくだった気持ちになり、涙にあふれた心をもつ女の方が、罪を犯さなかった普通の人よりもイエスの国に近い。普通の人というものは、罪を犯さなかったという消極的な価値しかもたない場合が多い」と語っているが、このような言葉にワイルドはぜひ分慰められたことであろう。

ルナンの『イエス伝』は、シュヴァイツァーに「最悪の意味でのキリスト教芸術」（『イエス伝研究史』）とよばれているように、神様の専門家たちの覚えめでたくない書物であるが、ワイルドには生き生きとしたイエスを再現させた。“Oscar Wilde and Ernest Renan” という論文の中で Joan Harding は、「ルナンにとってもワイルドにとっても、教会の誤りは、キリストの純粋な詩的精神を教義という静的な法典の中に移し変えようとするものである。神学は、宗教的真実を定義しようとするまさにそのことにおいて、無限の神を人間の概念のわく組みの中に閉じ込めようとするのである。そして宗教の本質を見失ってしまう」と述べている。

ワイルドが獄中で出会ったイエスは、「教義という静的な法典」とらわれないイエスであり、相手の悲しみを素直に自分の心にうつしとる豊かな想像力をもつイエスであった。ワイルドのいう「詩的正義」のイエスとは、罪や苦悩を美に変え得るイエスである。この世的にはぜひ分悲惨で苦しい牢獄生活の中で、ワイルドはそのようなイエスとの美しい出会いをしたと言えよう。これを、神との幸福な出会いの瞬間とよぶことは許されないであろうか。

『獄中記』におけるワイルドのカトリック志向

安藤千春

(上智大学大学院生)

宗教もしくは、その信仰心は、微妙な、同時に深刻な問題を抱えている。例えば、数ある評伝の中には、ワイルドがプロテスタントの幼児洗礼を受けたとするものもある。その後、ワイルドは、4、5才の頃に、カトリックの洗礼を受け、臨終の際に、再度、カトリックの洗礼を受けている。

V. Holland 編集『獄中記』後半部分から、ワイルドのキリストについての言及が始まる。それは、キリストと芸術家両者の人生を同一視することに始まり、キリストの資質と芸術家の資質は、共に“imagination”であるとする。この見解は、Paterの影響とする解釈も可能であるが、この様なワイルドのキリスト観に対し、キリストの神聖性無視、と見る批評家もいる。ワイルド自身の言葉によれば、確かに神聖性を否定しているが、『獄中記』においては、更に論を進め、キリストの位置を詩人の中に置き、両者の“imagination”を重要視する。次に、キリストの生涯は、素晴らしい詩であるとし、付け加えて、その詩とは、“idyll”であるとする。この見解は、Carlyleの影響とする学説もある。

次にワイルドは、ロマン主義におけるキリスト像の表出について言及し、続く箇所において、キリストこそロマン主義の“precursor”として、ここから、ワイルドが芸術家としてキリストをとらえていたことがわかる。つまりワイルドにとってのキリストとは、“imagination”を駆使する芸術家としてのロマン派詩人である。この見解は、19世紀末にかけてのキリスト教に対する当時の懐疑心の現れとして解釈も可能である。ワイルド自身の言葉にもあるが、ワイルドは、キリストを神としてではなく、最高の芸術家として信じていた。

しかしながら、キリストとは、“imagination”を駆使する芸術家としてのロマン派詩人というだけでは、『獄中記』におけるワイルドのカトリック志向は明確ではない。カトリック志向と言うからには、ワイルド自身がキリストに対して、何らかの形で自らを重ね合わせる点が必要となる。

もしも、ワイルド自身が、その生涯をキリストと同じく“idyllic”なものにしたならば、キリストを通して、天国への階段を歩んだであろうが、地上においては、Douglasを通して異なる階段を歩んだ。ワイルドの内におけるキリストと、Douglasは常に対立したものとして考えることが可能であり、反キリスト的存在としてのDouglasの位置はとても大きい。Douglasに対し、非難を浴びせ続けることにより、さらに反キリストとしての位置を明確なものにする。『獄中記』において、ワイルドは、1つの神話を形成したと言っても過言ではない。

この神話において、反キリストとしてのDouglasの影響力は、芸術家としてのワイルドのみならず、ワイルドの“imagination”を破滅に導くものとして描かれる。

図式的には、全てを割り切ることは、不可能ではあるが、『獄中記』においては、芸術家としてのワイルドにとって、不可欠な“imagination”を共通項として、ワイルドとキリストとの一体化を読み取ることができる。この反キリストとしてのDouglasから、ワイルドの内なるキリストへと、ワイルドは、脱出を試みる。Douglasには、“imagination”の欠落という言葉浴びせながら。

但し、問題点が残る。ワイルドの“imagination”を邪魔し、破滅させる反キリスト

としてのDouglasに対するワイルドの態度である。ある箇所においては、非難、中傷、そして厳格な態度。また一方で、Douglasに対し、sorrowやhumilityを含む態度や、許そう、許さねばならないとする態度。この相反する2つのワイルドのDouglasに対する態度は、『獄中記』のあちらこちらに散りばめられ、その矛盾が、読者に固定と流動を強いるテキストとなり、当惑させることは、しばしばであり、直線的な「読み」の流れを押しとどめようとする。

しかしながら、この相反する2つのワイルドの態度は、読者を当惑させるのに十分な矛盾ではあるが、この矛盾は、ワイルドの内にもある矛盾でもあり、自己に対しての1つの試練であり、この矛盾の片一方の要素である反キリストとしてのDouglasに対する憎しみを取り除かない限り、憎しみは芸術を破滅へと導くので、*De Profundis*という文字通りの深淵という心の監獄から出獄しなくてはならないことは、ワイルドは自覚していた。

結論として、*De Profundis*は、深淵からのワイルド自身の芸術家としての告白であり、心の変遷記として、また足跡の記録として考えられる。ワイルドは、“imagination”を通じて、キリストに近付こうとするのみならず、カトリックの幾つかの美德でもあり、また聖書の中において、各所に散りばめられているsorrowやhumilityに近付くことにより、カトリックに近付こうとするカトリック志向の要素は、充分にある。

藝術にたいする人生の呪いと復讐

西村孝次

(協会顧問・元明治大学教授)

オスカー・ワイルドの場合、いったい人生(現実)と藝術(創作)とはどのような関係にあったのだろうか? どのようなかわりのなかに置かれざるをえなかったのだろうか?

いま、わたしは、かつて少年のころ、ひとりの文学者の講演を京都の基督教青年会で聞いた日のことを思い出す。それは有島武郎(1878—1923)の話であった。すでにかれは長篇『或る女』(1919)や評論『惜しみなく愛は奪ふ』(1920)などを発表して制作活動の絶頂期を迎えていた。また他方、第一次世界戦争やロシア革命や米騒動以来、やかましくなってきた社会運動に刺戟されて、かれはその所有する親ゆずりの農場を解放してユートピア的な共産農園にしようとする理想主義者でもあった。

そのようなかれが、しかし、さまざまな内外にわたる苦悩のため次第に虚無的になり、たまたま当時もっとも新しい進んだ働く女性としてジャーナリズムの草分けのひとりで中